

磯原客舎（吉田松陰）

海樓かいろう 酒さけを 把とつて 長風ちやうふうに 対たいす

顔かお 紅くれないに 耳みみ 熱ねつし 醉眠すいみん 濃こまやかなり

忽たちまち 見みる 雲濤うんとう 万里ばんりの 外ほか

巨鼈きよごう 海うみを 蔽おほうて 朦朧もうどう 来きたる

我われ 吾わが 軍ぐんを 提ひつさげ 来きたつて 此ここに 陣じんす

貔貅ひきゆう 百ひやくまん万 髮はつ 上衝じやうしやうす

夢ゆめ 断たえ 酒さけ 解とけて 燈ひも 亦また 滅めつす

濤声とうせい 枕まくらを 撼うごかして 夜よる 鑿とうとう々

海樓把酒對長風 顔紅耳熱醉眠濃
忽見雲濤萬里外 巨鼈蔽海來朦朧
我提吾軍來陣此 貔貅百萬髮上衝
夢斷酒解燈亦滅 濤聲撼枕夜鑿鑿

解説 嘉永五年、松陰二十三歳の時、東北旅行の際、磯原海岸の旅館で外艦来冠の夢を見ての作。

語釈 ※客舎Ⅱ宿屋。旅館。※海樓Ⅱ海辺の高殿。※長風Ⅱ遠くから吹いてくる風。※醉眠Ⅱ酒に酔つて眠る。※雲濤Ⅱ雲と波。※巨鼈Ⅱ大きな海亀。※朦朧Ⅱ軍艦。※貔貅Ⅱ虎や熊に似た猛獣。勇猛な軍隊をさす。※葵蒙Ⅱ太鼓の音。

通釈 太平洋に面した旅宿に草鞋を脱ぎ、見晴らしのいい階上に上がって、万波を凌いでくる風に吹かれ、酒杯を挙げれば、酒量は進み、顔は紅くほてり、耳朶は熱くなつて、いつしか深く眠ってしまった。夢の中に、欄干の遥か彼方に、大亀が海を蔽うようにして、幾千幾百の戦艦が襲来して来るのを見た。我は軍の将としてこの海岸に完璧の布陣をする。一騎当千、精悍無比、百万の勇士は怒髪天を衝くばかり、虜敵粉碎の意気は凄まじい。ふと、夢も破れ、酒の酔も醒めれば、部屋灯火は燃えきつて消えていた。ただ、耳元には、荒波の騒ぐ音が打ち鳴らす太鼓の音のように聞こえていた。